山と博物館

第５５巻　第３号　２０１０年３月２５日　市立大町山岳博物館

ツクモグサ（八ヶ岳横岳にて撮影）

ツクモグサに想う

宮澤　陽美

六月下旬、ツクモグサに逢いに赤岳に登りました。白い柔らかな毛に包まれた淡黄色の花が、曇り空の下で遠慮がちに咲いていました。友人に、どうして九十九草というのかと尋ねられ、「百という字から一画目をとると白になるから、白寿と同じかな？でも、白い花とはいえないよね」などといい加減なことを言いました。植物図鑑をみたら、（発見者、城数馬氏の父上、九十九氏から名づけたもの）と書かれていました。でも、（祖父の名）と書かれている図鑑もあり、気になっていました。

そんな折、日本山岳会の機関誌『山岳』を見る機会があり、その第62年（１９６８年３月20日発行）に、『会員第一号、城数馬氏のこと』の文字をみつけました。

書かれたのは藤島俊男氏、記事の内容は、創立発起人の一人で最年長らしいが、年齢がわからない、調査の末やっと見つけたというものでした。ツクモグサと同様、霧に包まれていたようです。山草家、城数馬氏は一八六四年八月七日生まれ、弁護士で、日本山岳会創立に関わったのは四十一歳でした。その三年後、司法官として韓国に渡り、六十歳で亡くなる迄の十六年間を過ごしたというのです。

ツクモグサについては、（明治三十五年七月十七日信濃国八ヶ岳横岳採集の表示とともに、記要として「余之ヲ発見スルノ年祖父九十九君ノ三三回忌ニ当ル而シテ此草実ニ翁草即チ白頭翁ニ彷彿トシテ花ハ黄色ナリ余故ニ名ツク　面かげの翁に似たり九十九艸」という自筆の付記まで付いている。☒後略　人事院総裁佐藤達夫氏「わたしの宝物」中央公論社『自然』昭和三十七年十二月一日発行）と書かれています。その美しい標本が宝物だという佐藤達夫氏のこの文章も読んでみたいのですが、まだ見つけられずにいます。

そして、今度は晴れた日にツクモグサに会いに行きたいと思っています。　（大町山岳博物館友の会会員）

秦四郎が残した「日本アルプス登山記」
―もうひとつの「後立山連峰逆走記」―

清水　隆寿

1．はじめに

後に対山館主となる百瀬慎太郎が初めて北アルプスに登ったのは、明治39年、当時中学2年生の彼が友人等とともに白馬岳に登ったのがその最初と伝えられている。その後学業を終え、家業の対山館を継ぐわけであるが、その間も毎年のように北アルプスへの登山を続け、登山家としての慎太郎が最初に名声を馳せるのが、副題に掲げた「後立山連峰逆走記」（註1）の登攀、すなわち大正2年（1913）7月の後立山連峰・蓮華岳～大黒岳間の縦走であろう。

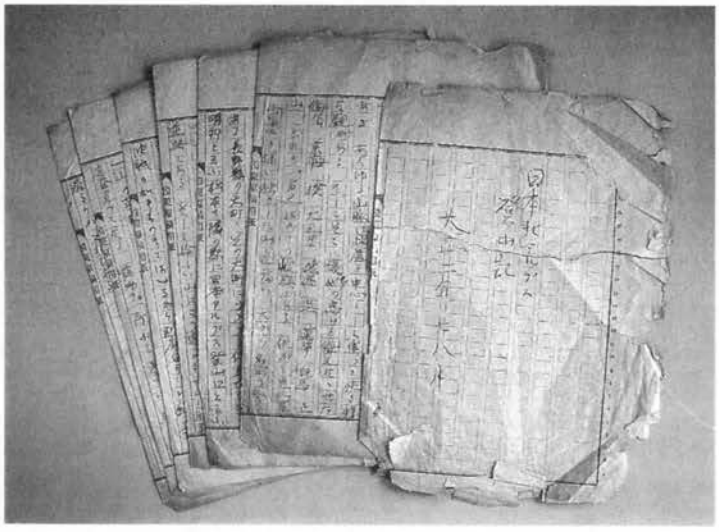
それまで難所である八峰キレット（2518m）を越え、五龍岳～鹿島槍ヶ岳間を縦走した例は、この山行の2年前、明治44年に中村孝二郎（日本山岳会）等による五龍岳～鹿島槍ヶ岳縦走が知られる。すなわち北から南への初登攀は踏破されていたが、同ルートを反対方向へ向かうことは、その当時これまで試みられたことが無かったと周囲の強力は言い、慎太郎自身もそう理解していた。これを逆方向に走破することがこの山行の主目的とされ、その想い入れが完遂後の手記に「後立山連峰逆走記」と書かせたものであろう。この登山史に残る壮挙を語るものは、これまでに慎太郎自身による報告を唯一の拠り所としていたわけであるが、昨年11月、この山行に同行した大町中学校教師、秦四郎氏のご親族より、この山行について書き記した登山記が山岳博物館に寄贈されたことで、慎太郎の「逆走記」の内容を補填し、さらには登攀の様子が別角度から詳細に記録されていることがわかる貴重な資料であります。この小稿ではもうひとつの「逆走記」ともいうべき秦氏の残した「日本北アルプス登山記」について、その概要を報告したい。

2．「日本北アルプス登山記」の原稿について

ここでは寄贈された原稿の概要と秦氏の来歴について触れておきたい。

表紙には「日本アルプス登山記」と大書されているが、原稿の書き出しには「日本北アルプス探嶮記」と別にしたためている。B4版原稿用紙で、総数は54枚（他に付属資料として履歴書2枚）にのぼるが、用紙に振られたページにしてP7、9、10、16、そして49以降の、登攀直後に書かれたと思料される当時の原稿は欠落している。また原稿は戦争の混乱でその一部は戦中既に無くなっていたようで、P50冒頭には、古い原稿が残っていたのでこれ以降の原稿は当時を思い出し30年を経て書き足したものである旨、わざわざ注記されている。これよりP50以降の10枚の原稿は、昭和18年（1943）前後に自身によって補記されたものであることが推測される。

秦氏の本籍は広島県呉市で、明治22年に出生している。慎太郎より3歳年上ということになる。その後広島県師範学校本科第一部を卒業し、引き続き同高等師範学校本科数物化学部卒業を経て、大正2年4月、24歳の時、初任校として長野県立大町中学校教諭に赴任している。大町中学ではわずかに1年間だけであるが教鞭を執っている。このことから秦氏は赴任してわずか4ヶ月に満たない7月末の夏休みを利用してこの北アルプスへの登攀に参加したことが伺える。以後の経歴は紙数の関係で詳細は省くが、昭和13年には愛媛県立東宇和高等女学校校長に任ぜられるなど要職を歴任され、登山関係では広島県の山岳会で会長を務められるなど登山界にも貢献され、山への思いは終生続いていたものと思われる。



秦氏原稿

3．百瀬慎太郎の「後立山連峰逆走記」

「（前略）北アルプスの連峰は物心の付く頃から、常に私をチャームして、私の全心を奪ってゐた。」で始まる百瀬の「逆走記」は、威圧的な題名とは程遠く、全編が詩のように美しい文章で綴られている。若干21歳の文章は、早熟の感を抱かずにはおられない。

ここでは、百瀬の書き残した「逆走記」から、本文を引用しながらこの山行の概要を記してみたい。「八峰縦走の記録は白馬岳方面からのもののみで、未だ嘗て我が大町方面から逆走した者はない。是非此の八峰を在来の記録に習はずに南から北へと渡り了へ、尚白馬峰頭にまで縦走を続けようと私は計画したのであった。それ故にわざわざ逆走とこそ名付けたのである。私の持っている地図はたゞ日本山岳会製の日本北アルプス一部、憶測図一枚のみ。之に因って鎗（註：鹿島槍ヶ岳）以北は知るよしもない。」

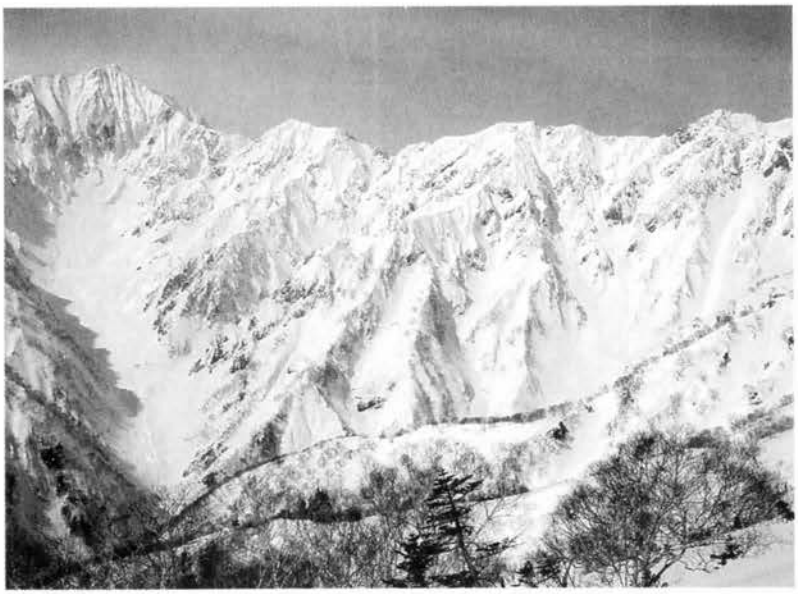
地元野口村で暮らす山人や大町の強力によっても鹿島槍ヶ岳以北は、当時未開の地であったことがわかる。まして詳細な地図もない状態での決行となった。同行者は百瀬、当時大町中学校教師の秦四郎の他、百瀬が信頼を寄せる強力の伊藤菊十、伝刀林蔵、勝野玉作の5人と前日に鹿島槍ヶ岳までの同道を依頼されたロシア人アレキサンドル・グーセフとその従者（通訳）萩御常太郎（イヴアン）及び2人のポーターの総勢9人が帯同した。出

発は大正2年7月27日～8月4日、全8泊の行程で、当初は白馬岳までの縦走が今回の計画であった。行程については、秦氏の「登山記」によると、以下のようである。

大正2年（1913）
7月27日　大町出発―大澤宿
28日　蓮華登頂・針木裏宿
29日　スバリ・鳴澤を経て乗越宿
30日　（荒天のため）午後出発・爺（ヶ岳）の近傍に宿泊
31日　鹿島槍宿（ロシア人一行は早朝鹿島へ帰る）
8月1日　八峰宿
2日　（現白馬村）四ッ谷に下山
宿泊
3日　白馬頂上宿泊
4日　大町帰着

※山名は秦氏原文のまま
※（　）内は筆者補註

本文の詳細については紙数の関係でここでは省くが、百瀬の文章は7月30日の夕飯の風景から眠りに誘われていく様で終わっており、百瀬の文には佳境である八峰キレットの苦闘の様子は書かれぬまま未完となっている。


鹿島槍ヶ岳から八峰キレット付近

4．秦四郎の「日本北アルプス登山記」

ここでは百瀬の「逆走記」との比較から、新たに分かった部分についていくつか記してみたい。

これまで私たちは「逆走記」を通じて、当然今回の山行は百瀬氏が口火を切って行われたものと思っていたが、意外や今回の発案は秦氏によるものであることが以下の文章から読み取ることができる。「同行者として大町に於ける日本アルプス案内の取締をなせる對山館と云う旅館の若主人を得た。これは甚都合がよかった（後略）。」「配下の強力にもこれを機会にこの辺の地理を知らせて置き度いなどの希望も向ふには希望があって」と書き記す。もっとも計画段階から強力集め、食料の調達一切は百瀬氏の采配に違いなく、用意全般にわたって旅館に依頼したと書かれている。しかしそこは理科の先生だけあって、写真機、清雨計、クリノメーター、寒暖計などの観測機器は秦氏ならではの個人装備として怠りがない。ちなみにこの時の山行の草鞋は四十足を用意し、強力の荷は十三・四貫（およそ50kg）だと書き記している。秦氏の文章には道中の話題も豊富に書き込まれ、駒草や雷鳥、有峰の話題など驚かされるものがある。あるいはロシア人アレキサンドルに対する百瀬氏と秦氏の対応の違いに思わず苦笑する。

31日早朝、ロシア人一行が鹿島集落へ帰るところから、百瀬が触れられなかった部分が書き記されるが、秦氏の本文も翌8月1日の八峰キレットの難所を書いたところで未完となっている。キレットは稜線から225mも下っての迂回であったという。

参考資料　山行ではこのような八角形の天幕を用いた。（写真、百瀬尭氏所蔵）
（写真は大正時代と思われますが、本文とは関わりはありません。）

5．おわりに

明治30年代の夏山単峰登山から、明治40年代になると登山はより困難な夏山縦走登山の時代へと向かい、まさに百瀬等の山行もこの渦中にあったことが分かる。あと数年すれば冬山登山時代を目前に控える時期にあたるのである。百瀬氏あるいは秦氏は文中、この登攀が八峰キレット登攀の南側からの初登攀であったと強調しているが、現在では学史が整理され必ずしもそう言い切れなくなっている。この辺の事情については紙数の関係で省略しましたが、秦四郎氏の残された「日本北アルプス登山記」の全文とともに、長野県民俗学会誌に今後掲載予定であり、そちらに譲ることと致します。

末筆になりましたが本文執筆に際し、秦崇氏始めご親族の方には大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

（註1）昭和37年「後立山連峰逆走記」（未完・大正2年8月末執筆）『山を想へば』百瀬慎太郎遺稿

（大町山岳博物館学芸員）

山桜の豊かに育つ日本にするために

草間　勉

1、はじめに

桜は、人々の生活する人里を彩る春になくてはならない木の代表であり、日本人の心であると思う。しかし、丈夫でどこでも育つと考えられ、手入れがされていない桜もあるのではないだろうか。最近は、自然条件が変化し、生育環境が悪くなっている。この中で、樹齢をまっとうして、見事に咲いてくれるようにするためには、手入れをして支えてやる必要がある。

2、桜から学んだこと

日本人は、稲作文化により水利用や地形を生かす経験があり、草木を育てる体験は誰でも持っていたと思う。ところが、都会生活や機械化がすすみ、自然から離れ土とかかわりなくすごす生活が多くなり、自然に学ぶ機会が少なくなっているように思う。何をどのようにすればどうなるかを考え、なすべきことを実行し、その成果を手にする。また、その反応を手ごたえにして、さらに、何が必要であり、何をすべきか考え、実行、整理しその次の方向づけと対策を練る。私は、こんなやり方を桜と対話しながら学び、今まで研究を続けて来た。

10m間隔、この間隔でも広すぎない（大町市平）

3、研究からわかったこと

新種の出現について

種子から桜を育てると自然交雑によって生じる中間種が多く出る。地域によって異なるようであるが、ここ北アルプスとその周辺は変種や新種の出る確率が高いように思う。年によっても場所によっても一定しないが、気象条件等が重なると種々の個体が出現する。

森上桜について

白馬村北城の森上の岩石に自生していた桜の種子をとり育てたところ、花をつけて驚いた。カスミザクラと思われるが、花色がピンクに近くて美しい。このカスミザクラの変種を「森上桜」という名で増殖し、すでに数本は定植した。

4、桜の育苗と管理方法について

幼木から成木に育てるまでのこと

除草と灌水、施肥。苗の大きさにより必要な間隔に植えかえて育てる。

定植について

根が充分伸長でき、養分をとれる土に植えれば大きくなる。反対に土が少ない条件で育てると小さくなる。大木になる桜は10m間隔位離して植えるようにする。植え穴も大き目で深く掘って、水はけをよくし、通気性のよい土を根のまわりに入れる。直径1～3m、深さも1m位は欲しい。

桜林での環境変化

年々植えた苗木は大きくなるが、山ではまわりの樹木も大きくなる。日当り、風通しをよくするために、林内や周囲の樹木を伐採し、桜の細枝、日当りの悪い枝を切り落し育ちをよくする。

病気や虫の対処は早目に

テングス病は、モヤシ状生長の枝に病気の葉や芽が多数出て、花芽が育たない。病気の枝は、見つけたらすぐ切断すると目立たなくなる。害虫も早目に見つけて葉を食べられないうちに取ってしまう。幹に入る甲虫の幼虫なども、皮を剥いで駆除する。

5、万人が桜守りに

日本の桜が戦中戦後、枯れたり失われたりしている。桜文化を世界にも自負できるようにしたいと日本さくらの会や日本花の会、農林省林業試験場（現、独立行政法人森林総合研究所）でその復興に尽力されて来た。これが着実に進展しただろうか。植えた数のみの宣伝や報道が多すぎ、その後の管理や手入れは十分か。

桜の記念植樹も、生長変化を観察し、命について学ぶことができる行事として行われていると思うが、植えっぱなしでもよく育つ強い樹種と苗木を選ぶためか、その後、手入れがされず忘れられてしまった桜はないだろうか。

私は、住人の方と桜を育てる機会をつくり、自生の野生種の桜の美しさや、植樹する苗の選び方、土などの植える条件、除草、肥料、水やりや支柱が十分か、虫や病気の対処法などについて、私の研究成果を共有していきたい。そして、標高差をつけた植樹や、桜以外の低木との混植、特徴表示プレートの作成など、住民の方とともに地域の自然植生を豊にする活動もしていきたいと思う。（終）

（桜研究家）

山と博物館　第55巻　第3号
二〇一〇年三月二十五日発行
発行　〒398-0002
長野県大町市大町八〇五六－一
市立大町山岳博物館
TEL　〇二六一－二二－〇二二一
FAX　〇二六一－二二－二二三三
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/
印刷　大糸タイムス株式会社
定価　年額　一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇－七－一三二九三

この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。